

# 担い手通信

2024  
vol. 5



## 火傷病ショック どうする花粉自給

# 除芽で使用量3割減 樹高低くし 採花速く・多く



梨栽培での花粉の自給強化へ、花粉の使用量の低減や採取の省力化につながる技術が登場しています。

### 作業に余裕

新潟県農業総合研究所によると、花芽を開花前に取り除く「除芽（じょが）」を行えば、授粉させる花が減るため、花粉の使用量を3割減らせるといいます。

花芽がつぼみになってから取り除く「摘蕾（てきらい）」の場合は、つぼみは側枝1メートル当たり12個残します。同研究所は、「幸水」と「豊水」で行った除芽の試験で、花芽を同8個にしました。その後は慣行と同様に人工授粉や摘果をし、同6果を収穫しました。果実の肥大や糖度への影響はなかったといいます。

余裕を持って作業できる利点もあります。摘蕾は開花前の2週間ほどで行いますが、除芽の期間は、剪定（せんてい）後の3月から開花前までの1カ月上確保できます。

### 6割時短も

埼玉県農業技術研究センターは、花粉を採取するための授粉樹の樹高を低く仕立てることで、採花の作業時間が4～6割短くなると示します。

主枝を低い位置で水平に誘引して、隣の木の主枝に接ぎ木する「低樹高ジョイント仕立て」にします。樹高は1メートルほどです。通常の樹高を制限しない立ち木状態だと、花が高い位置に咲き、採花に台や脚立が必要になる場合もあります。実践する埼玉県の農家は「台の乗り降りや、手を挙げたままの作業がなくなり楽だ」と言います。

立ち木より花芽の付く枝が出やすいため、定植2

年目から比較的多くの花芽が付きます。「松島」「新興」「長十郎」の3品種の試験では、花芽は定植2～4年目で立木の1.7～2倍、5年目以降は立ち木と同等です。ジョイント仕立ては、神奈川県が特許を取得しており、利用料などの支払いが必要になります。

### 切り枝加温

主産地の千葉県は効果的な花粉の採取・利用方法をまとめました。

それによると、冬の剪定では、花粉を採取する木の枝を、多くに残します。開花時期が早い品種に間に合うように、花粉を用意することも呼びかけます。

花粉採取用の木から花芽の付いた枝を切り、水稻育苗器で25度程度に加温、もしくはビニールハウスに入れ、開花を促します。いずれも枝は水に挿します。枝は、花芽のりん片が完全に脱落したタイミング（開花5日前、4月上旬が目安）で採取すると、授粉しやすい花粉が得られるとしています。

花粉の節約へ、人工授粉しないと着果しにくい品種から優先して授粉するのも重要としました。例えば、開花期に周囲に授粉樹がない「幸水」や「新高」などです。複数品種を育てる園地では、ミツバチの導入も有効としています。

（日本農業新聞 2023年11月17日）

#### 花粉の確保につながる技術

##### ■除芽

開花期前の花芽を側枝1m当たり8個になるよう除去  
→授粉させる花が減り、花粉の使用量3割減

##### ■低樹高ジョイント仕立て

授粉樹の主枝を横に誘引し、隣の木の主枝に接ぐ。樹高1mほどに  
→採花時間が4～6割減。作業時に台や脚立が不要

##### ■主な基本技術

- ・開花期が早い品種に間に合うよう花粉を用意
- 花粉採取用の木から花芽の付いた枝を採取。枝を水稻育苗器やハウスで保温し、開花促進
- ・花粉を節約
- 人工授粉しないと特に着果しにくい品種などを優先して授粉

（取材を基に作成）